

続

人間の道

— 聖書入門 —

松下 昌義



途 上 社

続人間の道 — 聖書入門 —

昭和55年9月30日

著 者 松 下 昌 義
発 行 所 途 上 社

京都市左京区下鴨南茶の木町29

頒 価 800円

ま え が き

「統一人間の道」。これは先に出版した「人間の道」と同じく、左京教会が毎週日曜礼拝の集いのために出す週報誌上に、「今週の聖書の言葉」と題して記した短い文章をまとめたものです。

思うに聖書特に新約聖書は、ひとりキリスト信者のためのものではなく、人間が人間として生きて行くために、確かに心得ておかなくてはならない根本的なそれを語り示しているものであります。その心得としての根本的なそれは、わたしたちの分別では仲々理解できぬものであり、従ってイエスさまはそれを、みずからの生きざまそのものによって語り示し給うたのであります。それ故に、わたしたちは、イエスさまの生きざまそのものによって語り示される真実を、何度もなんども聞き、行じ、修することによって、イエスさまが示さんとするそれを己が分別を越えて体得領解せしめられたいと願っています。

ここに記しましたつた文章は、イエスさまから私なりに聞いたそれを、行じ修して得たこと、体得領解させていだいた一部であります。まことに貧しいものでありますが、読んで下さるかたがたの聖書理解、イエスさま理解に少しでもお役にたてば幸いです。

一九八〇年八月三十一日

松 下 昌 義

「だれでも、情欲をいだいて女を見る者は、心の中ですでに姦淫をしたのである」

(マタイ福音書 5章28節)

これは、猥^{みだ}らな思いをもって女を見るな!! と言っているではありません。

わたしたちは、この聖書の言葉を読むとき、男が女を見る見方について、きびしい命令を受けているような気もちになってしまいます。しかし、先にも申しましたように、これは何ひとつの命令も禁止も語っていません。

では、これは何について語っているのでしょうか。以下少し考えてみましょう。

ひとりの男がいました。彼は「姦淫するな」という神の命令としての律法を固く守っていました。それ故に、この男は「おれは神の命令を守っているから、神の前では正しい人間である」と確信し、そのような自分を誇らしく思い、特に姦淫を行う者をさげすみ、悪人または罪人のようにとりあつかいました。その男にとっては、神に救われるのは自分で

神に罰せられるのは「姦淫をしてはならない」という神の命令にそむいて姦淫を行った男の方である、ということになります。

以上のことをサッーと考えると「その通りだ」と思います。

しかし、イエスは、わたしは正しい、という男に言われるのです。「だれでも、情欲をいだいて女を見る者は、心の中で姦淫をしたのである」と。問題は、ただ、姦淫をしたか否かという表面上のことからではない。即ち、おれは姦淫をするなどという神の命令を守って、姦淫をしなかつたから正しいのだ、救われるのだ、という考え方が問題なのです。

「お前の心の内をみよ、直接姦淫を行はなくても、心の内に猥らな思ひをひそかにもつて、女を見ていたとすれば、姦淫を行った者と五十歩百歩である。このことに気づかずして、直接姦淫を行ったものを責め、ひるがえって自分は正しいのだ、と誇らしく思うことは何たる傲慢であることか、その姿こそ罪人の姿、救われがたい人間の愚かな姿である。この自己の悲しい罪人性に見定めよ」というイエスの言葉が表記の聖書の言葉なのであります。

「いっさい誓ってはならない」

「あなたがたの言葉は、ただ、しかり、しかり、否、否、であるべきだ」

(マタイ福音書 5章34節)

なにゆえにイエスは「誓ってはならない」と言われるのでしょうか。その理由はかんたんなのです。即ち、「誓ったことは、すべて神に対してはたさなければならぬ」にもかかわらず、その誓いを「はたさない」からです。

しかし、「誓ってはならない」と申されるイエスの理由は、別に今一つあります。それは、誓うということは、もっぱら、その人間の意志力によりたのであることがらです。即ち、誓うということは、その人間の決意であり、決心の表明であります。つまり、すべてが、おのれによりたのでなされる行為なのです。問題はここにあります。

一人は、神に誓えるほど確かな存在であるのか、ということなのです。

かのペテロが、イエスに「どこまでもあなたに従います」と誓ったときイエスは、「あなたには出来ない」と申されました。(ルカ 22・33) イエスは知っておられたのです。ペテロが人間としてもっている弱さを。そして、その弱さの故にこそ、イエスは私たちを愛し、いとおしみ給うのです。救って下さるのです。

結局、誓うということは、一切自分のはからいで立とうとすることであり、神の愛を否定することでもあります。故に誓うな!! とイエスは申されるのです。己れのはからいをすてて、神の愛のはからいに自分をおゆだねして生きること、それが、ほかでもなく「しかり、しかり、否、否」の生活態度なのであります。

己れの分をわきまえ、我を立てて白を赤と言ひ黒を白と言う愚かを為すな!! ということでしょう。

「もし、だれかがあなたの右の頬ほを打つなら
ほかの頬をも向けてやりなさい」

(マタイ福音書 5章39節)

ただ読むだけなら、これはうつくしい言葉である。しかし、自分が実行することになると、とうてい出来ることではないと思います。そう思う時、この言葉は、たちまち自分の身近な日常性から遠のいて、自分の現実とはかけ離れた天空に輝く星の如きものとなってしまふ。

しかし、イエスの言葉は、ただ人間の憧憬を語ったにすぎない、といったものではない。イエスの言葉は、人間の歪んだ在りように鋭く切り込んで、幸いに生きる人として在るべきところにあらしめようとするものです。にもかかわらず何故にイエスの言葉が、私たちをして人間の憧憬を語っているにしかすぎないもののように思われるのでしょうか。その理由は明日です。即ち、わたしたちが、イエスの言葉を常に命令とか禁止の言葉として

受けとろうとし、それを守るか否かという思いでかかわれているところにあります。

表記のイエスの言葉がわたしたちに語りたいことは何なのでしょうか。右の頬だけでなく左の頬をも打たせてやりなさい、ということではありません。ここで、イエスが言いたいことは、「目には目、歯には歯」ではなく、相手方の内なる思いをよくよく自分のことのようにして理解し共に歩みなさい。という相手方への愛あるかかわり方を語っているのです。

「手向う」ことによって本当の和は生れません。相手の立場・心・思いをよく受けいれること、即ち「その人と共に」歩み、その人の心を「断る」ことなくかわる、そのところにある和が生じ、幸いが生る、というのです。これは理想ではありません。現実のこととして、今から自分の生活にとり入れるべき知恵です。

「祈る時には、偽善者たちのようにするな。彼らは人に見せようとして、会堂や大通りの辻に立って祈ることを好む。よく言っておくが、彼らはその報いを受けてしまっている。あなたは祈る時、自分の部屋にはいり、戸を閉じて、隠れた所においてになるあなたの父に祈りなさい。」

(マタイ福音書 6章5節・6節)

表記の言葉につづいてイエスは次のように申されます。「すると、隠れた事を見ておられるあなたの父は、報いて下さる」と。

祈ることに^{おそ}畏れを失った者は偽善者であると思います。

今祈る自分の祈りが、神にとどき、聞かれていると信じて祈る者には、祈りは^{おそ}畏れであり、限りなき喜びであります。その祈りが神に聞かれ、どのような様であれ、必ず応えられ

ると信じて祈る者にとっては、も早や、祈りに於て、他人の目など問題ではないのです。祈る姿の敬虔さのカ・ッ・コ・よ・さを人に見せようとして祈る祈りは遊びであります。神を畏れぬ偽善者であります。

「しかし、隠れた事を見ていられるあなたの父は、報いて下さる」わたしは今、自らの偽善の祈りに目覚め、祈りに猥れをいだと共に、限りない喜びを見出していきます。

それは、礼拝についても言えます。礼拝は、生きてい給う神との交わりであります。礼拝は聖書についての教養を身につけるための牧師の講話ではありません。

祈りを聞いて下さる神の前に、いつわらざる自分をなげ出すことです。「よろしくお願います」ということです。礼拝に於ける偽善者は、自分に問題のない時に礼拝をし、問題が自分に生じた時には礼拝しない者です。礼拝が本当に生ける神との交わりであれば、問題の時こそ、礼拝し、祈るべきではないでしょうか。神は必ず報いて下さいます。

「すると、隠れた事を見ておられるあなたの父は報いて下さる」

(マタイ福音書 6章6節)

イエスは、そのご生涯の最後に、「父よ、わたしの霊をみ手にゆだねます」(ルカ23・46)と申され、息をひきとられました。

イエスは、そのご生涯のいつ如何なるときでも、自分の思いではなく、神の御意に生きることが最善であると信じて行動し決断されました。

イエスは、ご自分が権力者に捕えられることがわかった前夜、ゲッセマネという園で自分の身の処し方について、苦しみつつ、「わが父よ、もしできることでしたら、どうか、この苦しみをわたしから過ぎ去らせてください。しかし、わたしの思いのままにはなく、あなたのみこころのままにしてください」(マタイ26・39)と祈られました。

イエスは、他の誰れよりも、自分のことを想い、愛し、心配してくれるものが神である

ということを知っておられ、信じておいでになったが故に、その慈愛深い神の御意に従うことを、すすんでなされたのです。イエスは、父なる神へのこの信仰のゆえに、いつも問題を神にあずけ、自分の手で処理しようとされなかったのです。

表記の聖書の言葉は、私たちの祈りに対して神は必ず「報いて下さる」とあります。「報いて下さる」とは、「祈り求める通りになる」ということではありません。「よろしい」であれ「だめ」であれ、いづれにしても、その祈りを祈る者にとって「最善の答え」が必ず来る、ということなのです。たとえ、自分のおもいに反していても最善の答えなのである。というような答えが来る、ということなのです。

私たちは、自分の思い通りの答えが神から来るときだけ「神の恵みの答えだ」と思っています。私達は、自分の利己心で、自分の目先のことのみ考えて答えを出してしまします。しかし、神は、私達が思い及ばない将来を含めて、その最善の答えをくださるのです。

「天にいますわれらの父よ 御名があがめられますように」

(マタイ福音書 6章9節)

これは、イエスが弟子たちに教えたもうた祈り、つまり主の祈りのはじめの呼びかけの部分と第一の祈りとの部分であります。

「天」とは、わたしたちの一切のはからいから隔絶している世界ということ、わたしたちの思義が絶対に及びつかぬところということの表現であります。

「います」とは、存在するという信仰の表現であります。即ち、「天にまします」とは、私たちの知情意に於ては一切かかわることが出来ぬもの、ということ、わたしたちの知情意においては「ある」とも「ない」とも言ったり、考えたり、思ったり出来ないそれという意味の表現なのです。むつかしく言いますと「絶対無」ということ、また「絶対他者」ということであります。

故に、もしわたしたちが、神の存在について「ある」とか「ない」とか語るとは、人間の考えや思い（観念）による世迷言（よまいごと）であり、観念の遊びをしていることになり、さらには人間の幻想にしかすぎません。

にもかかわらず、その絶対他者を「われらの父よ」と呼びかけ得るとは一体全体どうしたことなのか、これは絶対にありうるべきことではない。しかし、あり得べきことがないことがあり得ている。これこそ正に矛盾、正に奇跡、驚ろき以上のおどろきそのものであります。

「父」とは、わたしの知情意の内にかかわれるもの。即ち、人間の世界の内にあることしかも「われらの父よ」と言っただけでかかわれるほどに、わたしたちの身近、それは父と子ほどの近さに於ける人格的なかかわりの存在となり給うということです。

思い考えも及ばない絶対他者を、今や、こともあろうに「われらの父よ」という関わりが生じた。それが祈りに於て生じている。

「天にいますわれらの父よ、御名があがめ
られますように」

(マタイ福音書 6章9節)

「天にいます、われらの父よ」とわたしたちが、わたしの言葉として語り、呼びかけ得るということは、ただ神の一方的絶対的なお恵みにのみよるのであります。神の許しなくしては、とうてい語り得ない言葉なのであります。わたしたちは、この祈りに於て天と地とが一つとなり、神とわたしが一つとなり、さらに聖と罪とが一つとなるのを体得するのであります。

さて、主の教え給うた祈りは、内容的に六つにわかれています。その第一の祈りが、「御名があがめられますように」です。「御名」とは神ご自身ということ、名は体をあらわすと申しますように、神ご自身のすべて、即ち聖さ・愛・能力、そのすべてをそのまま言い表したのが御名ということであります。すべての聖さをたどり行くとき、ついに行きつく聖

さの根源、それなくしては一切の聖さが在り得ないという根源、御名とはその根源を表現しているのです。さらに、御名とは一切の愛、それなくしては愛が愛であり得ない、という愛の根源そのものの表現でもあるのです。それは能力ちからに於ても同じです。つまり、御名とは、一切の根源、一切のよって生じ在らしむところの神そのものの表現であります。

次に「あがめる」とは、その御名を他のすべてのものとは、はは・きき・りり・分分・つつ・てて、自分の日々の生活に於て第一に眼をつけ、気をおくということであります。

「みみ・そそ・もも・くく・そそ・もも」同じようにする生活をしてはなりません。第一に知り第一に見るべきものを第一にする。結局、わたしの生活の中で、いづくに於ても第一に見・知るべき、自分自身の存在の根源、その一切の存在の根源を知らしめ、見させて下さいという祈りが、「御名をあがめさせて下さい」ということであります。

「天にいます われらの父よ、御名があがめ
られますように」

(マタイ福音書 6章6節)

以上に述べましたことを要約して申しますと、次のようになります。

「わたしたちの思いや考えをはるかに超えておいでになるかた。さらに、わたしたちの考えおよびつかぬ慈愛そのものでいらっしゃるおかた。わたしたちの罪汚れに比して全く聖くいらっしゃるおかた。否、右のように考え思うことすら出来ない、尊たつといおかたでいられるそのあなたを、こともあろうに「われらの」と呼びさらに、「父よ」と呼び得るまでの親しさ、近さに関わらせていただく、その驚ろき、そのありがたさ。これは、ただただ一方的に、このわたしをいとおしみ給う父なる神のご慈愛のお恵みによるのであって、決して絶対に、わたしたちのはからいによるものではありません。も早やわたしは、わたしの父となり給うおかたの故に、生くるも死ぬるも平安であります。これは何とありがたいこと

でありましようか。」これが「天にいます、われらの父よ」という祈りのところです。

次に、「御名があがられますように」という祈りについての先の解説の要約とそのところは以下の通りであります。

「わたしたちの生活に於て、第一になさねばならぬことは、第一になす。これは、ものごとの道理にかなっています。わたしがあることにより神があるのではない。神があつてわたしがあるのです。神の慈愛のもとにわたしがある。これが人間が人間として在るために必要な第一にもつべき知恵です。この第一にもつべき知恵、つまり恵を知ることを第一にもたせて下さい。いつでも、どこでも、何を為すにも、この第一の知恵を第一にもたせて下さい。この知恵は、ただ、わたし一人のみならず、わたし以外のすべての人々ももつことにより、平和・幸福がすべてに來ますように」

以上が第一の祈りです。

「御国みくにが、きますように」

(マタイ福音書 6章10節)

これは、第二の祈りであります。

「御国」とは、神のお慈悲みこころ深いご支配ということですから、第二の祈りは「わたしたちの日々の生活に、神の慈悲深いご支配が来ますように」ということになります。たしかに、わたしたちの日々の現実には悲しみや苦しみなどがあり、神の愛とめぐみのご支配が一日も早く来て、平和と幸福の毎日を、すべての人々が楽しくすごせたらどんなにかすばらしいだろうと思えます。ですから、「御国が来ますように」と、わたしたちは、たえず祈り求めねばなりません。

しかし、この第二の祈りの内容は以上述べました求めにつきるのでなく、次に述べるような祈りでもあるのです。

即ち、未だ神の慈悲深いご支配が、わたしたちのもとへ到来していないので、早く到来

させて下さい。お願い申し上げます、という懇願の祈りというよりも、すでに到来している神のおめぐみに対して、このわたしが目覚めることが出来ますように、という祈りである。ということです。

ある時、「神の国はいつ来るのですか」という、パリサイ人の質問に対してイエスは「神の国は、実にあなたがたの、ただ中にある」とお答えになりました。(ルカ17・20)

神の慈悲深いお恵みのご支配は、すでに私たちのもとに到来しているのです。しかし、わたしたちはそれを見ずして、早く到来して下さいと祈っている。見えないから、そのように祈るのです。では、なぜ見えないのでしょうか。「我」に止まるからです。とすればこの第二の祈りは「神さまの慈悲深いご支配が、わたしのもとにすでに来ていることを、わたし自身の我の心を取り去って下さることにより、みさせてください」ということなのだということがわかります。

「みこころが、天に行われるとおり、地にも
行われますように」

(マタイ福音書 6章10節)

これは第三の祈りです。

「みこころ」とは慈悲・愛の一言につきます。されば、この第三の祈りは、神の慈悲・愛がこの地上に及びますように。ということですが、すると、これは第二の祈りと全く同じ祈りだ、ということになります。

たしかに第二の祈りと同じ祈りであると申せます。しかし、第二の祈りが、神と私個人にかかわる祈りであるとすれば、第三の祈りは、私以外の他の多くの人々のための神に対する「とりなし」の祈りとも言えます。

第二の祈りについて述べたときに、すでに申しましたように、神の慈悲・愛はすでに私たちのもとに及んで充ち充ちているのであります。にもかかわらず、その慈悲と恵の現実

に一向に目覚めることなく、未だ神の慈愛が少しも、私たちのもとに及んでいないかのよう
に、それを神に求めている。とすると本当に求めねばならぬことは、すでに及んでいる
神の慈愛に対して開眼せしめられることであります。そして正に、第三の祈りは、この地
にある人々がその慈愛に開眼されることへの「とりなし」の祈りであると共に、人々の心
をして、すでに私たちのところに及んでいる大いなる慈愛に、眼覚めるべく、この私を用
いて下さい。という祈り心も含まれているのであります。

人が神に願いをかけて祈ることにより、神が人の願いをかなえて下さる。というのでは
ありません。神が人間を愛し、神が人間に慈愛でもって願いをかけていて下さる。その神
の慈愛の願いにつつまれ、いだかられている現在の自分の生活に開眼することが聖書が教え
る信仰であります。

「みこころが 天に行われるとおり 地にも
行われますように」

(マタイ福音書 6章10節)

「生きているのは、もはやわたしではない。キリストがわたしのうちに生きておられるのである」(ガラテア2・20)とパウロは申します。他のところでは次のように言っています。「キリストの内に自分を見いだす」(ピリピ3・9)と。

パウロは、も早や、自分の命に自分をたくしてはいません。永遠であるキリストに自分を全くゆだね、まかせて安心立命しています。

自分の命、自分の生活、自分の人生というものが、全くキリストの愛の手の中に在るということ、それ故に、キリストの愛の手の中に在る自分にたより生きようとするのではなく、キリストの愛の手の中に在る故に、キリストの愛の手のみを信じて生きる。これが、「キリストの内に自分を見出す」ということです。そこで見いだす自分は、も早や、キリスト

の命、即ち、永遠、絶対なる命に生きる自分なのです。

自分の命に自分をたくして生きるのが、わたしたちの毎日の生活です。自分の命に生きるものは、損いやすく、限りあるものです。ですから、このような自分の命に自分をたくして生きてゆくことは、かならず、不安が伴う。しかし、「キリストの生命の内に自分を見いだす」者は平安を得る。これ、キリストとわたしが一つとなるということでもありません。否、地が天に包まれてしまうこと、即ち「みこころが、天に行われるとおりに、地にも行われる」ことにほかならない。

地が天におおわれ、みこころのみが輝く世界。これが信仰の世界であります。この世界に自分というものを置いて生きてゆく平安、これが信仰の平安であります。この平安が地上のすべてに及びますようにというとりなしの祈りが第三の祈りです。

12

「わたしたちの日ごとの食物を、きょうもお

与えください」

(マタイ福音書 6章11節)

人は食わずして一日たりとも生きてはゆけない。食うことは、人にとって余暇のことでなく、絶対必要事であります。故人は、「わたしたちの日ごとの食物を、きょうもお与えください」と祈るし、祈らざるをえないのです。

しかし、今日、人は食物の必要を充されすぎて、「わたしたちに、日ごとの食物をお与え下さい」という、祈りを忘れてしまったかのようです。

この祈りは、ただ食物にかかわる祈りにつきるものではありません。この祈りは、人間存在の根本にかかわる祈りであります。なぜなら「わたしたちの日ごとの食物を、きょうもお与え下さい」とは、「わたしを生かして下さい」という祈りにほかならないからです。さらに、この祈りには、「わたしを生かすおかたこそ、あなたであります」又「あなた以外に、わたしを生かすおかたは他にありません」という信仰の告白があります。

この祈りを口にする者は、人間存在の根本を見ているものであります。自己の人生の根

本的な支えが何であるかを、しっかりと見つめているものでもあります。この祈りの大切さはここにあり。自分を生かして、即ち、自分の生も死もすべてその中に保っているおかたへの感謝、喜びをいただくこと。このことこそ、自己の人生を充実せしめる本であります。

「あなたがたの父なる神は、求めない先から、あなたがたの必要なものは、ご存知である」(8節) ご存知ないから祈り求めるのではない。すべてこちら側の必要を、ご存知でいらっしゃるが故に、それに感謝し、安心を喜び祈るのであります。

13

「わたしたちの日ごとの食物を、きょうもお与えください」

(マタイ福音書 6章11節)

食物がなければ食うことが出来ない。しかし、食物があり余るほど在っても、食うことが出来ない場合だってあります。それは人が病に犯される時です。一滴の水さえ咽を通すことが出来ない病にかかることもある。誰れだって、自から好んで病にかかる者はいない。病は自からの願いに反して、ひとを犯し、人を弱らせたおしてしまふ。その時ひとは、はじめて、食う物が在る喜びよりも、手や口が働いて、胃や腸が働いて食物を食うことが出来る喜びを知る。そのことに感謝することが出来るようになる。つまり健康で食事がいただけることは、決してあたりまえのことではなく、ありがたきことなのであると。

「わたしたちの日ごとの食物を、きょうも、お与えください」という祈りは、食物をいただけのありがたきについての感謝であり、さらに、いただかせてください。という手や口や腹や足が働くことへの祈りでもあります。

わたしたちは、自分の口が腹が手が足が自分のもの、自分の自由になるものだと思つています。しかし、それは全くの思いちがひというもので、それらは決して自分のものではありません。いふなれば神のものです。与えられているものです。お恵みなのです。それ

故に、旧約聖書ヨブ記に於けるヨブという人は、自分の一切を失ったとき、「神は与え、神はとり給う、神の御名はほむべきかな」（1・21）と神を感謝しました。ヨブは、自分にかかわるすべを神の恵みであることに眼ざめたときに、その祈りが出来たのです。すべてに安心と平安を得たのです。

わたしたちも、神の恵に感謝して、「わたしたちの日ごとの食物を、きょうもお与え下さい」と心のそこから祈りたいと思います。

14

「わたしたちに、負債のある者を、ゆるしましたように、わたしたちの負債をも、おゆるしてください」

（マタイ福音書 6章12節）

これは、主の祈りの第五であります。

わたしは、昔し主の祈りを祈るとき、この第五の祈りが素直に言葉として口にすることが出来ませんでした。

「わたしは、ひとを赦していないのに、赦したかのような顔をして、どうして臆面もなく祈ることが出来ようか」と思ったからです。しかし、やがてその考えは第五の祈りの心にふさわしくない、ということに気づきました。

たしかに、自分の罪の赦しを願う祈りに、その条件として、ひとの罪を赦しますからという表現になっています。この「から」という条件的表現が、わたしにとってつまづきとなっていたのです。

「ひとを赦せ、されば、わたしも、おまえを赦してやる」という心は、ほかでもなく、このわたしの心なのです。しかし、神の心は、そうではありません。「わたしも赦しましよ。だから、あなたも赦してやりなさい」というのが神の心、イエスの心です。(ヨハネ 8・11) この神の愛、慈悲に対する感謝と信頼にもとづいて、主の祈り全体は成り立つ

ているのです。とすれば、第五の祈りの「よ・う・に」とは、決して、わたしたちが神に赦される条件を意味する言葉ではなく、神の大いなる愛、慈悲のうちに赦されて在ることへの深い深い感謝から生じて来る自分の在りようへの決意、決心を表する言葉ではないかと思えます。第五の祈りを塚本訳は「罪を赦してください。わたしたちも罪を犯した人を赦しましたから」と訳し、リビングバイブルは「私たちの罪をお赦してください。私たちも、私たちに罪を犯す者を赦しました」と訳しています。これら二つの訳の方が、第五の祈りの心をよく表しているように思います。

15

「わたしたちに、負債のある者を、ゆるしましたように、わたしたちの負債をも、おゆるしてください」

(マタイ福音書 6章12節)

ひとを救せ。と聖書に記してあり、命ぜられてあるから、ひとを救す。これでは本当にひとを救したとは言えない。また、困っている人がいたら助けよ、と聖書が教えているから、困っている人を助けた。これでは本当に人を助けたことにはならない。

救すとか助けるとかいう行為は愛の行為であり、愛の行為は、他人に命ぜられたからする、教えられたので、その教えを守るためにする。というようなものではありません。愛の行為は、相手をいとおしむ心が自と内から生じ、それに動かされて為す行為であります。そうせずにはおれない。そうするのが当り前、それが自然という、それが愛というものです。誰かに命ぜられたから、聖書にそう記してあるから、イエスが言ったからそうするということでは、只教えを守った、命を守った、というだけで極めて事務的・機械的・形式的・律法的・非主体的であります。ですから、パウロは次のように申しました。「たとえ他人のために、自分のからだを脱かれるために渡しても、もし愛がなければ、いつさいは無益である」と。

イエスがすべての人々に言いたいことは、正しい宗教は、教えるとか命ずるとかいうこ

とでもないし、さらに、守るとか、従うとかいうことでもない、ということですよ。最も大切なことは、そうせずにはおれないという思いとところが、その人の内に自と生じせしめられるようなものにふれることによって生じる、ということ。その「もの」こそが実は、直接的にはイエスの愛であり、神の愛なのです。ですから、神の赦しに接してのみ、ひとは他人を赦さざるを得なくなるのです。その得なくなる、ということに生きることが「信仰に生きる」ということなのであります。

16

「わたしたちを、試みに会わせしないで、悪しき者から、お救いください」

(マタイ福音書 6章13節)

これは、イエスが教え給うた祈りの最後、つまり第六番目の祈りであります。

それにしても、色々な慾の誘惑に負け、明日の自分の身の上がわからぬ弱き者が私たちです。

私たちの人生は、いくら気をつけ、よく計画して歩んだとて、思いもよらぬ出来ごとの介入によって、およそ予期せぬ結果に泣いたり、笑ったりするものです。

誘いざなわれる自分の弱さ、己これに及ぶ抗しがたき力を人はそれを運命・宿命と呼ぶ。

この運命・宿命を超え行こうとする祈り願いが、正に第六の祈りなのであります。

この第六の祈りは、他の五つの祈りに勝って切実な祈りであります。

日ごとの食物が与えられ、人との係わりで愛を保ち得れば、人の生活は最も幸福であると言える。しかし、この幸福な生活の内に伏兵がひそみ、思わぬ不幸を人にもとらします。それ故に第四・第五と祈った者は、当然のこととして、「神よ、私をしていろいろな慾の誘いざないに負けしめず、悪しき抗しがたき力より、お救い下さい」と祈らざるを得なくなるのです。

己れの人生を己れ自から決定し進み歩み行けると思う者ほど人生の何たるかを知らぬ者

はありません。彼は人生の強者でなく人生についての無明なる者、強き者のように見えて、最も弱き者であります。

ところで、表記の祈りに注意しなければならぬことの一つは、「悪しき者からお救い下さい」という祈りです。悪しき者を滅ぼし給えとは祈っていないということです。

又、「試みに会わせないで下さい」とも祈ってはいないということです。

17

「わたしたちを、試みに会わせないで、悪しき者から、お救いください」

(マタイ福音書 6章13節)

イエスは、その生涯の最後、即ち十字架にかかる前に、弟子たちについて次のように祈られました。

「わたしがお願ひするのは、彼らを世から取り去ることではなく、彼らを悪しき者から守って下さることです……」(ヨハネ福音書17章15節)

弟子に対するイエスの願ひは、ひとに及ぶ抗しがたき誘いの力に押しつぶされることなく、それらをのり越えて、力強く前へ進んで行くことだったのです。

パウロは申します。「神の国は言葉ではなく、力である」(コリント第一4・19)と、即ち、神のお恵みのご支配の中に生かされる者は、人がこの世で必ず出会うであろう。さまざまな予期せぬ困難・苦難の出来ごとを、のり越えて行く者とされ、又のり越えさせて下さるよう導かれるのであります。神の恵に生きる者は「復活」すると聖書にあります。が、「復活」とは「グ・シ・ヤ・ンと立・ち・上・る」というのが原意です。つまり、苦しみ、悲しみ、死に對してさえも何らまどうことなく、き然として立ち上るといふこと。「神はイエスを死より、よみがえらせたが、その力で、わたしたちもよみがえらせてくださるであろう」とパウロは申します。

人生とは、誘うものとの闘いであります。そして、その闘いに於て人は人生を突感する

のであり、その闘いに於て喜び、悲しみを知らしめられ、人間として成長するのです。神にある信仰とは、人生の闘いの場からの逃避を願うことではなく、人生の闘いの場でしっ・か・り・と立ちつづけることを願うことであり、立ちつづけさせて下さるお方の導きを信じ、よりすがって生かさせていただくことなのであります。そのように生かさせて下さいという祈りが第六の祈りであります。

18

「若者よ、さあ、起きなさい」と言われた。
すると、死人が起き上がったものを言い出した」

(ルカ福音書 7章14節-15節)

ナインという町で、イエスは葬式の一行に出会われた。

息子の死を悲しむ母親は、死んだ息子の入った棺に、とりすがり泣きくずれていました。

イエスはこの母親を見て深い同情を寄せられ、「泣かないでいなさい」と言われ、棺に近より手をかけて申された言葉が表記の聖書の言葉であり、その結果に起った出来ごとの説明でもあります。

棺の中で死んで横たわっていた息子が、イエスの呼びかけによって起き上がったものを言い出した。この出来ごとを見た人々は、母親をはじめ、そのすべてが、「神はその民を顧みてくださった」と言って、神をほめたたえたとあります。又、人々は「おそれをいだいた」ともあります。

もし、現代の私たちが、この出来ごとに出会ったら何と思いうけとるでしょうか。おそらく「おそれ、神が自分たちをかえり見てくださった」とはうけとらずに、「そんな馬鹿なことがあるか」と疑いかつあざ笑うかも知れません。

おもうに、現代の人々は神の恵みに感謝するとか、神をおそれるとかいったことを忘れてしまったようです。そして、すべてのことを人間中心に考え受けとろうとする故に、人間の知恵、自分の考えに於て計り理解出来ぬことは疑い、切りすててしまいます。そこに

は人間の最大級の傲慢があります。それはうぬぼれというものです。

イエスがナインの町でなされたことは、神の人に対する愛を語り示すことであります。この神の愛に、みごとに正しく応えたのがナインの人々でありました。

今日わたしたちは、己が凡小の知恵や知識とそれによる計量を唯一のたのみとして、これに関わり応じるのでなく、おそれと感謝とをもって、ものごとを見、思いたいです。

19

「先生、わたしたちはあなたから、しるしを見せていただきとうございます」

(マタイ福音書 12章38節)

私たちは「しるし」がほしいと思う。

最近、十字架からおろされたイエスの遺体をくるんだものだといわれる衣、即ち「トリ

ノ聖衣」が話題を呼び、毎日八万人の人々がトリノへトリノへと集るとのこと、9月8日付の朝日新聞にのっていた。

2000年前に「しるしを見せて下さい」と願ったイエスの弟子と私たちの思いとは、少しも変わらない、昔も今も、人の思うことは、少しも変わらない。

「しるし」とは、サインです。サインとは、ある何かを示し、ある何かを語っているのです。わたしたちは「しるし」そのものでなく「しるし」が示していること、「しるし」が語っていることを見、理解しなければなりません。

しかし、人々は、「しるし」そのものに興味をもち、好奇の目を向ける。「しるし」そのものを求めることは、〃渴して塩水を飲むがごとし〃であります。それは、より大きく、より不思議な「しるし」を求めたくなるからであり、それは一種のプレイ（遊びごと）にしかすぎず、ただそれだけの意味しかない。「しるし」をもって、人は己れの生死を離れることは出来ない。

ある意味では、聖書の中には「しるし」が満ちている。それは他でもない「しるし」が

示すものは神の愛、慈愛だからです。

イエスの「復活」は「しるし中の、しるし」であります。ここには神の愛が、私たち朽ちて行く人間に対する神のいいしれぬ愛が最も大きく、力強く、慈悲深く語り示されています。それは「全く心配しないでいなさい。安心していなさい。」と語りかけてくれる最も確かなしるしであります。

20

「あなたがたは、聞くには聞くが、決して悟らない。見るには見るが、決して認めない。」

(マタイ福音書 13章14節)

言葉を聞いて、その内容を理解しないことは、形をみてその心を理解しないのと同じであります。

形とは、そのもののい。ち。または、そのもの。の。こ。ろ。が現れたものであります。したがって、わたしたちは、現れた形を見るとき、その形を通して、そのものい。ち。または、こ。ろ。を理解しないならば、その形を本当に見たとは言えません。

しかし、世間には、形だけを見て、そのこ。ろ。を一向に理解しようとしなない人が多くいます。つまり、形はこ。ろ。の現れである、と、いうことを知らないままで、形を見て、と、いうことです。そのような人は、実は形を粗末にしている人なのです。形を見て、そのこ。ろ。見ずとは、実は形をも本当に見ていない、ということなのです。

このことを考えながら、表記の聖書の言葉を読むとき、その意味するところも、おのずと理解出来るというものです。

「聞く」とは、語る人のこ。ろ。を理解することです。

「見る」とは、現れているもの。の。こ。ろ。を見ることです。

イエスは多くの言葉をお語りになりましたし、多くのこ。と。をなさいました。しかし、そのイエスが語った言葉そのものにとらわれてしまった人々は多くいても、その言葉のこ。こ。

ろにふれそれを理解した人々は、本当にわずかだったので。

イエスの多くの業に接した人々は多々いましたが、その業によって見せて下さろうとした神の愛のところに接した人々は、本当に少しでした。

わたしたちは、聖書を読むとき、その言葉のところに接し、そのところを読む者になりたいと思います。これ即ち聖書の言葉を大切にすると、ということなのです。

21

「わたしは、この岩の上に、わたしの教会を建てよう。いかなる力も、それに打ち勝つことはできない」

(マタイ福音書 16章18節)

イエスさまは申されました。「ふたり、また三人が、わたしの名によって集っている所

には、わたしもその中にあるのである」(マタイ18・20)と。

大切なことは「わたしの名によって集う」ということです。「名によって」とは「イエスの愛、神の愛の中に身も心も全く置いて」ということです。イエスへ入信することです。

信仰とは、教義を理解することではない。教会に入ることではない。唯、洗礼を受けることではない。信仰とはイエスの愛、神の慈愛に今日の吾が身、明日の吾が身が支えられ保たれていることの安心を知り、唯、今平安を知ることです。この信仰者の姿を、信仰者本人が言葉をもって、イエスに告白したのが、「あなたこそ生ける神の子キリストです」ということばだったのです。つまり「私の生死の一切をつかさどるお方は、あなたです。それ故に、わたしは死んでも生きても全く安心です。平安です。」ということ。この告白をペテロから聞いたイエスがペテロや他の弟子に向かって語られた言葉が、表記の聖書の言葉であります。

「この岩」とは、ペテロの信仰の告白そのものを指しています。

以上の意味から「教会」とはイエスの名によって集う一人一人の信仰者の集りです。そして、そこでは、神の大いなる慈愛が吾が身に及んでいることを喜び感謝し讚美することだけがすべてなので、その他の一切は不要なのであります。

22

「時は満ちた。神の国は近づいた。悔い改めて福音を信ぜよ。」

(マルコ福音書 7章15節)

これは、イエスさまが、伝道の最初に語られた言葉であります。

先ず「時は満ちた」と申されます。つまり「神の時がちょうど良い時になった」ということです。

人が計画し、予定し、努力してすすめて行く「時」は、これ即ち「人の時」であります。

「あのようによしう」、「このようによしう」、「ちよどよい時だ」等々すべて「人の時」であります。私たちは各々の「人の時」又は「自分の時」をもって生活しています。ですから、ほとんどの人々は「神の時」があることを全く知らない。

「神の時」とは、神がすべての存在にとって最もよいとされる「時」のことです。しかし、私たちはこのような「神の時」があることを全く無視し、「人の時」、「自分の時」に従って生きつづけています。ですから、イエスさまが「時は満ちた」と申されても、人々は「人の時、自分の時は満ちていない」と言わんばかりに、イエスの言葉に耳を傾けようとはしません。

次に「神の国は近づいた」、これは「神のお恵みの救いの御手が来ました」という意味です。今や神の救いの御手は、この私にも及んでいる、ということなのです。なんとありがたい宣告でしょうか。しかし、人々は、そんな「時」は私は知らぬ、と「自分の時」で判断して無視しています。

「人の時、自分の時」のみにしがみつき、そののみたよって生きる生きかたを捨てて、

「神の恵み深い時」に眼を注いで生きることが「悔い改め」と言います。そして、いついかなる時も、「神の恵み深き時」が、自分に成ることを信じて生きることが信仰というのです。

イエスの生涯は「神の恵みの時」の証にほかならないと申せます。

23

「丈夫な人には医者はいらない。いるのは病人である。わたしが来たのは、義人を招くためではなく、罪人を招くためである」

(マルコ福音書 2章17節)

ひとを義人のゆえでなく、罪人、悪人の故に救うてくださる。これが聖書の教える福音であります。神のこの恵みのみこころ、慈悲深いおんはからいをその身をもって、私たち

に語り示し給うたのがイエスであります。否、神は、ご自分の人々に対する思いを、イエスによって語り示し給うたのであります。

「わたしを見た者は父（神）を見た者である。私と父（神）とは一つである」とイエスは申されます。

イエスは姦淫の罪を犯した女をゆるし、窃盗の罪のある取税人をいつくしみでつつみ給うたのです。

人の世はいつも善と定められたものを称え、美しいと思われることなどを愛します。そして悪を貶み、醜なるものを嫌悪します。さすれば、しよせんは、善人は救われ、悪人はすてられ、美はほめられ醜はさげすまれねばならぬのが人の世であるとすれば悪人、醜なるものはどうすればよいのでしょうか。心ならずも己れに反して悪人であり、醜態をさらす我々の救いはどこにあるのでしょうか。

しかし、イエスは己れを十字につけ殺害を加える者の救いのために祈り給うたのであります。これは、神がすべてを赦しすべてを救い給おうとする愛の願いのあらわれであり、

あらゆるものをそのままに抱き上げて下さる恵みそのもののあらわれであります。善も悪も、男も女も老いも若きも、知識なきものも知識あるものも、金なきものも金あるものも、神の愛は、いづれもわかたず、いづれをも選ばず、すべてを赦し救い給うのであります。この絶対の愛、絶対の救いの御手に、己れをそのままゆだねる、これが聖書が教える信仰であります。

24

「イエスは、自分をとりにかこんで、すわっている人々を見まわして、言われた。『ごらんなさい、ここにわたしの母、わたしの兄弟がいる』と」

(マルコ福音書 3章34節)

“血は水よりも濃し”という諺があります。それは肉親のつながりは理屈を越えて切り

がたきものである。という意味であります。

たしかに肉親の情は、普通人々にとって断ちがたき情であります。特に、親、兄弟に於ては。

しかし、イエスは、その肉親の情を超えて、すべての人々を親のように、兄弟のように関わられる。

普通、私たちが断ちがたきものと思っている肉親の情を断ってしまっている。否、断つということは正しい表現ではなく、超えていられる。どうやらイエスは、私たちが、物や人を見る次元で、それらを見ていられるのではないようです。普通、私たちが判断する価値の基準で、物や人を判断していられるのではないようです。

わたしたちが人や物を見、判断する基準は、自分、又は自分達にとっての利害得失であります。どうしても、そこからわたしたちは逃れ切れません。ここに人間の罪深さがあります。人間の悲しさ哀れさがあります。正義を語り、愛を語り、信仰を語る時にも、わたしたちは、この人間の罪から逃れることは出来ません。

しかし、イエスは、私たちが信じがたい世界に立って、すべてを見ていられる。イエスを見つめつづける時、そのイエスが見ていられる世界、立っていられる世界が少しづつ見えてくる。そして、その世界が、自分の上に来て、おおいかぶさるのがわかって来る。その世界に自分がつつまれていくことがわかる。これが、神の恵みにつつまれ生かされる信仰の喜びと平安と感謝の世界であります。

25

「イエスは人々がきて自分をとらえて、王にしようとしているのを知って、ただひとり、また山に退かれた」

(ヨハネ福音書 6章15節)

イエスのところに、ぞくぞくと人々が方々から集って来た」(マルコ1・45)その時か